

中国考古学史におけるソヴィエトの影響

劉 斌

張 婷

(訳) 米 川 裕 治

目次

I. はじめに	71
II. 中ソ考古学関係の変化	71
III. 「考古学の本質」の理解への影響	72
IV. 考古学の理論と方法、技術への影響	73
V. 考古学用語に与えた影響	74
VI. 人材育成への影響	75
VII. 文化財関連法規への影響	76
VIII. まとめ ～ソヴィエト考古学の影響と評価	76

論文要旨

中国考古学誕生から約100年がたった今日、欧米との学術交流はますます盛んである。関連する交流史的考察は多い。だが、かつて中国近現代史に計り知れない影響を与えた隣国ソヴィエトの考古学については、現在に至るまでほとんど論究されてこなかった。ソヴィエトから中国考古学への影響は、背景となる両国間の政治的距離に比例して変化してきた。その変遷は大きく第一期（1917～1949年）、第二期（1950～1960年代初頭）、第三期（1960年代初頭～1980年代初頭）、第四期（1980年代初頭～1991年）の4つの時期に分けることができる。

その中でも第二期にあたる1950年代から60年代初頭にかけて、中国では国を挙げて先進的なソヴィエトの経験を学ぶという大きな動きがあった。それを背景として考古学の面でも全面的にソヴィエトの学問を学んだ。中ソ間の考古学者の相互訪問、ソヴィエト考古学の著作の翻訳による紹介が活発になされた。これらの学術交流を通して、考古学に対する本質的な理解、技術や方法、考古学用語、人材の育成、文化財関連法規といった多くの分野において、ソヴィエト考古学は中国考古学に影響を及ぼした。

本稿では、それらについて項目ごとに検討を加え、今日的視点から、中国に影響を与えたソヴィエト考古学の評価を試みた。

劉 斌（リュウ ヒン）

中国西北大学文化遺産学院 副教授

張 婷（チョウ テイ）

中国西安碑林博物館 副研究館員

米 川 裕 治（よねかわ ゆうじ）

奈良県立橿原考古学研究所 指導研究員

I. はじめに

中国の考古学は誕生から 100 年になる。その発展は中国の学者たちの努力によるものだが、外国からの影響も大きい。初期の中国考古学は西洋の舶来品と形容できるもので、仰韶村や周口店遺跡の発掘ではアンダーソンやブラックら西洋人が中心となった。今日の改革开放路線の中、中国と欧米の学術交流と協力はますます増え、欧米から中国考古学への影響について、学界でも多く議論されている。しかし、かつて中国近現代史に多大な影響を及ぼした隣国ソヴィエトについては、今日に至るまであまり研究されてこなかった¹⁾。

II. 中ソ考古学関係の変化

ソヴィエトの中国考古学への影響は、背景となる中ソ関係を念頭において考察しなければならない。中ソ考古学関係は主に両国の政治的な距離に比例して変化してきた。その歴史はおおよそ 4 つの時期に分けることが出来る。

(1) 1917～1949年

1924～1931年、中ソは関係悪化によって断交したが、満州事変後、両国の関係は急速に改善された。しかし 1937 年以降、戦争により中国の考古学は外国との交流を中断した。そのため両国には直接的な往来がなく、以下に示すようなわずかな交流のみとなった。例えば、ソヴィエトの文化財関連法規の翻訳²⁾、考古学関連組織の紹介³⁾や、北京原人の頭蓋骨についてのソヴィエト人による復顔研究などである。

(2) 1950～1960年代初頭

建国後まもなく、新中国はソヴィエトの経験を吸収するようになった。1953年2月に毛沢東が「ソヴィエトの先進的な経験を学べ」との号令を出し、これがソヴィエト考古学の全面的な学習を促した。この時期は中ソ考古学の蜜月期と言えよう。その親密さは、まず人員の相互訪問という形で現れた。ソヴィエトの考古学者キセリョフは 1950 年と 1959 年に訪中している。初訪中時に北京などで計 23 回の講演を行い、聴衆は累計 2 万人以上にのぼった。中国にソヴィエトの先進的な考古学を紹介し、その進むべき道をはっきりと示したのである(写真 1)⁴⁾。1950 年代末に



写真1 キセリョフの南京博物院訪問
(写真中央がキセリョフ)

ソヴィエトはクリュコフを派遣し、北京大学で 5 年間、中国考古学を学ばせた。中国からは、尹達 (1954 年)、裴文中 (1954 年)、夏鼐 (1956 年)、佟柱臣 (1956 年)、鄭振鐸 (1957 年) らが相次いでソヴィエト連邦科学アカデミー物質文化史研究所とモスクワ大学歴史学部を訪問した。1958 年、中ソ間で考古学上の協力計画が持ち上がり、王伯洪と王仲殊がソヴィエトに 3 か月派遣されて研修した。彼らは精力的に遺跡見学や研究者訪問をし、さらにはホラズム地域の発掘調査に参加した⁵⁾。考古学関連著作の翻訳状況からも、両国関係の親密さが看取できる。ソヴィエト側は夏鼐、尹達らの中国関連著作を翻訳したり、蘇秉琦による鬲鷓台遺跡の報告を紹介したりした。また中国側は 1950 年からソヴィエト考古学の略報を翻訳し始めた。1955 年に『考古通訊』が創刊されると、1962 年までにソヴィエト考古学に関する 68 編の文章が掲載され、重要な情報源となった(図 1)^{訳註 1)}。中国で翻訳出版されたソヴィエト考古学の専門的著作としては、『キセリョフ講演集』、

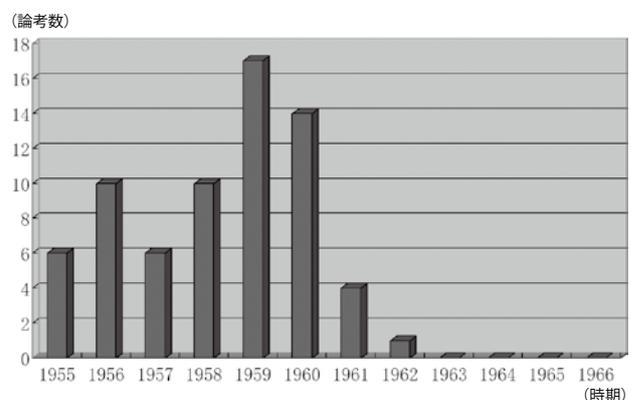


図1 『考古』(『考古通訊』)掲載ソヴィエト考古学関連論考数の推移(1955～1966年)

『ソヴィエト大百科事典』中の「考古学」・「石器時代」・「青銅器時代」・「鉄器時代」といった項目や、『考古学通論』、『原始文化史提要』などがある。

(3) 1960年代初頭～1980年代初頭

1960年代、中ソは決裂し、考古学界の関係も急転直下する。『考古』は1963年以降ソヴィエト関連の訳文を掲載しなくなり、10年以上続いていたソヴィエト考古学の研究はその歩みを止めることになった。

60年代中葉、両国間で国境紛争が増大し、考古学界においても相互批判が誘発された。ソヴィエトの学者は中国が「アジア中心主義」だと批判し⁶⁾、「毛沢東主義者が隣国（おもにソヴィエト）への領土的野心を弁護」していると主張した⁷⁾。一方で中国側は、オクラドニコフとワシリエフについて、前者は資料の恣意的な解釈でソヴィエトの中国侵略を正当化し、後者は中国文化西方渡來說を支持したと批判を展開した。中国ではこの二人の翻訳文集まで出現したが、言説をあげつらって批判することが目的であった⁸⁾。

(4) 1980年代初頭～1991年

1980年代には、中ソ関係が次第に正常化し、考古学の方面でも交流を取り戻した。1983年にソヴィエトのデレジャンコが中国社会科学院考古研究所を訪問し、両者間の相互往来は次第に増えていった。中国ではかつて批判されたオクラドニコフとワシリエフの『中国文明の起源』や『ソヴィエト連邦中央アジア考古学』、『南シベリア古代史』などの著作まで出版されるようになった⁹⁾。

しかし、この時期すでに外国との交流や学習の相手は欧米に重心が移っており、中ソ相互交流の影響はあまり大きくなかった。政治的な雪解けが進むにつれ、かえって中国では、仰韶文化母系説やその研究方法¹⁰⁾、モルガンの研究モデルといったこれまでの定説に対する疑義をただす動きが起こった¹¹⁾。1950年代ソヴィエト考古学がもたらした教条主義の弊害はここに至っては是正されるようになったのである。たとえば考古学科を人類学部の中に設置する大学が現れたり、父系制・母系制研究の旧弊からの脱却が試みられたりするなど、ソヴィエト考古学の中国への影響は次第に薄れていった。

上述のようにソヴィエト考古学は第二期（1950年～1960年代初頭）を中心に中国に影響をもたらした。以下、

項目ごとにその影響を検討したい。

Ⅲ. 「考古学の本質」の理解への影響

1950年にキセリョフが学術講演をしてから、中国の研究者はソヴィエト訪問と考古学の翻訳書を通じて、いわゆるプロレタリアート考古学の体系を学んだ。このことで考古学そのものに対する理解も変化していった。

(1) 歴史学としての考古学

1950年にキセリョフが中国を訪問する前、中国の学者は様々な学問分野に考古学を位置づけていた。傅斯年や李濟は考古学を「歴史学の一部」と認識し¹²⁾、林惠祥らは先史考古学を人類学の一分野と見なした¹³⁾。蘇秉琦は考古学が独立した一つの学術分野であって、歴史学や人類学の一部とする位置づけが適切でないと考えていた¹⁴⁾。

しかし、ソヴィエトでは早くから考古学が歴史学の一分野とされ、「鉄鍬を装備した歴史学」と称されていた¹⁵⁾。キセリョフは1950年に中国で講演した際に「ソヴィエト考古学はマルクス・レーニン主義歴史学の有機的な一部分であり」「決して自然科学ではない」と述べた¹⁶⁾。その後、翻訳されたソヴィエト考古学の著作では、「マルクス主義歴史学だけが考古学を歴史学に位置づけ」ていると繰り返し強調され、ブルジョア考古学との本質的なちがいが指摘されている¹⁷⁾。

ソヴィエトの学者の考え方はもともと中国考古学界の主流と合致するものであったが、それに加えて当時はソヴィエト考古学を模範とする独特の雰囲気があり、異議を唱える学者もすぐに見解を改めさせられた。例えば裴文中はかつて1950年代に石器時代の考古学を自然科学に属するものと考えていた。しかし、「ブルジョア考古学の泥沼にはまっている」¹⁸⁾、「歴史科学を逸脱している」¹⁹⁾などの批判があり、旧石器研究が「歴史科学に貢献」し、「自然科学から社会科学へと所属が移行する」ことを認めざるを得なくなってしまった²⁰⁾。

(2) 研究目標の向上

1950年以前、李濟をはじめとした中国人考古学者が歴史の発展法則追究を第一とすることはなかった。一方、マルクス主義歴史観では、歴史の発展には法則があるとされた。ソヴィエトの考古学者は「社会が一定の法則に沿って

発展」する「法則の究明」を研究目標とし²¹⁾、「歴史発展の客観的な法則性を否定する」ブルジョア考古学者たちを批判したのである²²⁾。1950年以降、中国考古学はマルクス主義の指導の下、この壮大な方向性を受け入れ、現在に至っている。

(3) 研究モデルの変更

1950年以前には、尹達が延安で出版した『中国原始社会』²³⁾という例外はあるものの、中国で氏族制度が考古学的に検討されることはなかった。一方、原始社会の氏族制度を扱ったモルガンの『古代社会』について、マルクスは詳細な抜粋を作成し、多くの重要なコメントを残した。エンゲルスはこれを承けて名著『家族・私有財産・国家の起源』を書いた。この学史をふまえ、ソヴィエトの考古学者は系譜などの氏族制度研究を特に重視している。このような研究モデルは1950年代のソヴィエトの翻訳書によってもたらされ、1950年代末から80年代まで父系制・母系制研究は中国新石器時代考古学の重要な研究テーマとなった。

IV. 考古学の理論と方法、技術への影響

1930年代からソヴィエト考古学は集落研究と技術面で大きな進歩があり、中国考古学に一定の影響を与えた。

(1) 理論と方法

考古学文化 アンダーソンは1923年に「仰韶文化」という考古学文化を命名したが、中国でその考古学文化の理論的理解が進んだのはソヴィエトの著作が翻訳された1950年代以降である。翻訳された『ソヴィエト大百科事典』「考古学」の項では、考古学文化の定義、区分の指標、命名方法、形成要因、同族関係などの理論問題が紹介されている。夏鼐は「考古学文化の命名の問題」²⁴⁾と「再論考古学文化の命名の問題」²⁵⁾において、ソヴィエト考古学の翻訳書から多く引用しており、その考え方を吸収していることが窺える。

型式学 1930年代、ソヴィエト考古学界は、モンテリウス型式学の中に、唯心論や、唯物論、人類史への生物学的解釈の援用などが見出せることを批判した²⁶⁾。1950年に翻訳されたソヴィエト考古学の著作には、型式学批判が多く見られた。これは中国の学者の型式学に対する見解に影響を及ぼした。1958年には、かつて蘇秉琦が『鬲鷓台

溝東区墓』で試みた型式学的方法について様々な批判が出現した。「彼の型式学では、型式変化の要因が人間側の要求によるのではなく、あたかも器物それ自体がはっきりとした法則にしたがって、自己進化するかのように見える」という批評や、「彼が社会や歴史、遺物の製作者や使用者などから乖離してしまっている」、「彼の研究のどこを見ても人間活動の痕跡や、社会関係といったものが看取できない」といった非難を含むものであった²⁷⁾。これはソヴィエトの学者の論調とよく似ている。

集落考古学 1930年代、ソヴィエトの考古学者がトリポリエ文化の遺跡を発掘調査し、大面積を発掘する集落考古学の方法を切り開いた²⁸⁾。1950年代のソヴィエトの翻訳文で強調されたのは、「大規模発掘が古代社会の生活や経済を考古学的に研究する唯一の科学的方法」だということである²⁹⁾。これがプロレタリアート考古学とブルジョア考古学を区別する指標とされた³⁰⁾。その影響を受けて、中国の学者も大規模発掘調査を強力に展開した³¹⁾。半坡遺跡の発掘は、ソヴィエト集落考古学の学習の産物といえよう。

(2) 技術

製図 ソヴィエトの考古学者は、トリポリエ文化の住居跡を発掘する際に、縄の網を張った木製取り枠(1m×1m)を使用して遺構平面図を作成した。発掘報告書にはよく家屋や寺院などの建造物の復元図が掲載され、器物については照明の投影を利用した図が作成された。中国の考古学者は、半坡遺跡や廟底溝遺跡の現地調査や発掘報告書でこれらの技術を使用した(写真2、図2)。

花粉分析 1950年代に翻訳されたソヴィエトの著作中では、花粉分析による自然環境研究の重要性が強調されている。1956年に翻訳されたソヴィエトの『花粉分析』では、考古学における花粉分析の応用法について専門的な解説がなされた³²⁾。この影響で、半坡遺跡の発掘では、中国初の土壌サンプル採取と花粉分析が行われた³³⁾。

使用痕分析 ソヴィエトの考古学者セミョーノフは使用痕研究の上で優れた業績を残している。1957年に名著『先史時代の技術』を出版したが、中国ではすぐにその序論部分とソヴィエトの学者の書評が翻訳された³⁴⁾。セミョーノフに啓発された劉敦願、佟柱臣らは、1960年代から使用痕研究に関心をもち始めた³⁵⁾。



写真2 半坡遺跡における実測作業
(写真右手前では木製取り枠を使用して遺構平面図を作成している)

復顔 ソヴィエトの考古学者ゲラシモフは、1930年代に北京原人の頭部像を復元したことがあるが、彼は頭蓋骨からの復顔技術に卓越していた。1950年代初頭に中国の学界は彼の業績を詳しく紹介し、1958年に名著『頭蓋骨による顔貌復元の原理』を中国語に翻訳した³⁶⁾。呉汝康らが北京原人の頭部像を復元する時、彼の復元を参考にしただけでなく、その研究方法を用いて新しい研究を進めたのである(図3)³⁷⁾。

このほか中国は1950年代に、ソヴィエト考古学の訳著を通して、遺跡発見における航空写真の利用、水中考古学、化石中フッ素含有量年代測定、X線撮影、金属のスペクトル分析による産地同定、土壌リン化合物分析による古代居住地判定といった技術を学んだ。これらは中国の考古学者

の視野をおおいに広げることになった。

V. 考古学用語に与えた影響

ソヴィエト考古学を学ぶ過程で、学術用語のいくつかはその影響を受けた。ソヴィエト考古学の訳書を通じて、新しい学術用語が中国に導入されたのである。

(1) 争点となったソヴィエト由来の学術用語

先史 1952年に翻訳されたソヴィエトの『原始社会史』では、「先史」という概念が問題とされた。「原始社会史研究に対する反科学的な見解であり、真の歴史とは言えない」としている³⁸⁾。その後翻訳された『ソヴィエト大百科事典』「考古学」項をはじめとする多くのソヴィエトの著作は「先史」に対して否定的であった³⁹⁾。そのため、1950年代の中国でも、「先史」に対して多くの批判が集まった。1960年代に夏鼐は、「先史」を単純に「文字出現以前の時代」という意味に限定すれば使用することができると控えめな表明をしたが⁴⁰⁾、それがブルジョア的であるとして非難された⁴¹⁾。そのため1950年代後半から80年代半ばにかけて、中国考古学界ではほとんど「先史」という言葉を使わず、ソヴィエトでよく使われた「原始社会」に取って代わられた。

猿人 コスヴェンは、『原始文化提要』(1955年訳)で、動物界において生物学的に分岐した人類が「ヒト」となった段階では、もはや「猿人」という用語をあてるべきでは

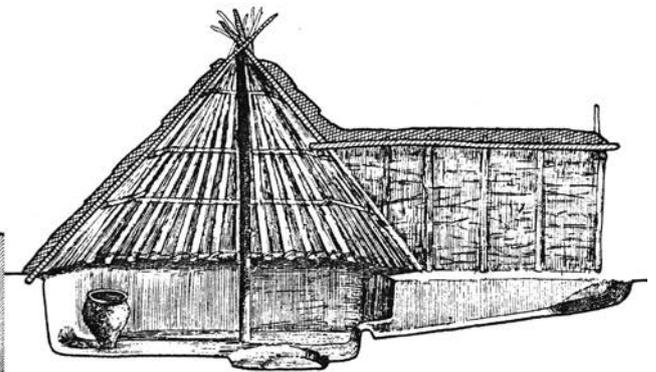
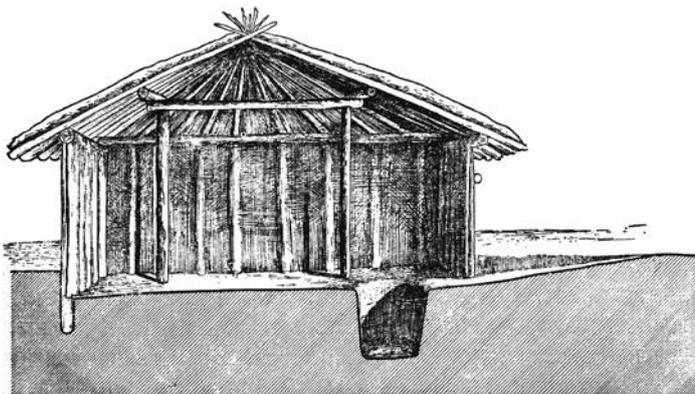
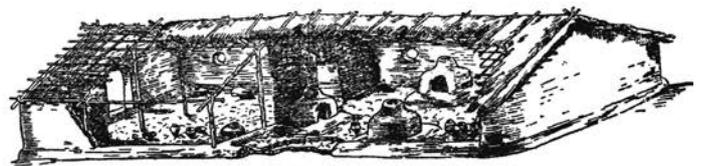
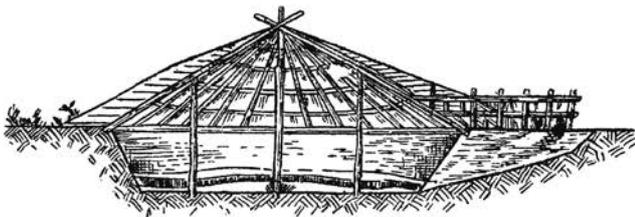


図2 ソヴィエトと中国の建物復元図
(上2点がソヴィエトの報告書掲載図、下左は中国廟底溝遺跡の報告書、下右は中国半坡遺跡の報告書掲載図)

ないということを表明した。コスヴェンの提起により、中国考古学界では「猿人」使用の可否についての議論が巻き起こった⁴²⁾。しかし、ほかにソヴィエトからの反対はなく、「猿人」はその後も引き続き使われた⁴³⁾。

(2) ソヴィエト考古学がもたらした新しい用語

物質文化史 ソヴィエト成立後、「考古学」という言葉は、西欧ブルジョア的だという理由で長い間使用されず⁴⁴⁾、「物質文化史」が使われた。ソヴィエトの考古学研究所は1919年に物質文化史研究所と改称され⁴⁵⁾、ポーランド⁴⁶⁾や朝鮮⁴⁷⁾もこれに倣った。

1950年にキセリョフが中国で学術講演をして以降、「物質文化史」は「考古学」の同義語として、中国の考古学に多く登場するようになった。夏鼐は「考古学」を「物質文化史」と言い換えることに抵抗を示したが⁴⁸⁾、それでも文化大革命期到北京の「考古研究所」が「物質文化史研究所」と改名させられてしまった⁴⁹⁾。

「考古学文化」関連用語 「考古学文化」と「族的共同体」という2つの用語は、1956年に翻訳された『ソヴィエト大百科全書』の「考古学」の項に初見される。同年に翻訳されたモンガイトの『ソヴィエト考古学』の序言には、「文化共同体」という用語が使用されている⁵⁰⁾。

「経済・文化類型」と「歴史民族誌的領域」 この二つの用語は、1950年代にソヴィエトの民族学者、チェボクサロフらが提案したものである。モンガイトの『ソヴィエト考古学』の訳書は「経済・文化類型」という言葉を中国にはじめて紹介した。1956年から1958年にかけて、チェボクサロフは中央民族学院で授業を担当したが、『民族問題翻訳叢書』に掲載された彼の講義録では、「経済・文化類型」と「歴史民族誌的領域」という二つの学術用語が詳細に解説されている⁵¹⁾。その後、中国ではこれらの用語を用いて考古学文化の地域性などの理論的問題を議論した⁵²⁾。彼らが提示した「親族文化区」、「歴史-文化区」⁵³⁾、「焼畑農耕経済文化類型」などの概念は、この二つの学術用語から啓発を受けたものかもしれない。

VI. 人材育成への影響

民国期の中国では高等教育機関に考古学科は設けられていなかった。この時期の一般的な考古人材育成方法とは、賈蘭坡のように実践の中で学ばせるか、夏鼐のように国外



図3 ゲラシモフによる北京原人頭部像
(1930年代の復元)

派遣して研修させるかどちらかの方式であった。1952年、北京大学は中国で初めて考古学科を設置したが、人材育成の上では、ソヴィエトの影響を受けていた。

(1) 専攻の設置

1952年に中国はソヴィエトの高等教育体制をまねて学部の設置、調整を行った。ここで初めて大学に考古学課程が開設されることになったのである。多くは歴史学部の中にあったが、国学部、社会学部、人類学部、芸術学部などに置かれる場合もあった。ソヴィエト考古学は歴史学の一分野であり、そのため1922年のモスクワ大学考古学科開設以来、ソ連の十数の大学の考古学科はすべて歴史学部の中に置かれている。中国ではソヴィエトに倣って、北京大学、西北大学などで相次いで成立した考古学の学科や教室を、ほぼ例外なく歴史学部の中に設置している。1980年代初頭になってようやくこのような状況が一部の大学で改変されるようになった。

(2) 課程体系

1952年、大学全体の学部が調整された後、学部ごとの課程の配置が行われた。このとき北京大学は、中国の実情にあわせて多少の改変を行ったものの、ほとんどすべてをソヴィエトから学んだ。考古学科も例外ではない。北京大学はモスクワ大学から送られてきた基本教材や教育計画をもとに第一歩を踏み出した。モスクワ大学のキセリョフの援助を受け⁵⁴⁾、カリキュラムや教育課程の設置から教育指導要綱まで、モスクワ大学をほぼ一体的に模倣したのである⁵⁵⁾。

北京大学の当時の考古学実習は、実習、教育実習、卒業

実習の三つに分かれていたが、すべて「ソヴィエトから学んだ」ものであった⁵⁶⁾。1954年にソヴィエトの教育制度に倣って、北京大学考古学科は歴史学科考古学専攻に改められ、学部の修業年限は4年から5年に変更された。また、ソヴィエトから大学院副博士育成制度を導入し、修業年限もソヴィエトと同じ4年となった。授業課程の休暇制度、試験制度（口頭試験）、採点制度（5段階制）はすべてソヴィエト式であった⁵⁷⁾。

(3) 教材編纂

1952年、中国教育部が「ソヴィエトの大学教材を計画的に翻訳せよ」と指示し、1956年にソヴィエトの『考古学通論』が翻訳出版された。1958年の建国十周年を記念して、北京大学考古学専攻の教師と学生が共同で『中国の考古学』を編纂したが、これはエンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』とモルガンの『古代社会』をもとに、ソヴィエトの『考古学通論』や『原始文化史提要』をモデルとして中国考古学を叙述したものであった⁵⁸⁾。

1950年代にほかの大学で編纂された教科書の中にも、『考古学通論』というソヴィエトの教育指導要領の影響が見てとれる。荊三林の『考古学通論』や梁釗韜の『考古学通論』などは明瞭である。

VII. 文化財関連法規への影響

中国の文化財関連法規の多くは、1930年公布の「古物保存法」の内容を継承しているが、同時にソヴィエトの影響も受けている。

(1) 施工前調査の原則

ソヴィエトでは1950年代以前から文化財関連法のなかで、建設部門が施工前に遺跡の入念な調査と測量を行うようはっきりと指示されていた⁵⁹⁾。1950年以前の中国には開発にともなう事前発掘調査の経験がなく、50年代初頭は工事中に文物の不時発見があって初めて考古学部門に通知され、発掘調査が行なわれた。しかし、造成部分の遺構がすでに破壊されているという事態がよく発生していた⁶⁰⁾。来訪したソヴィエトの専門家は、中国に対して基本建設事業に先立つ埋蔵文化財残存状況の確認を提案した⁶¹⁾。国家文物局局長の鄭振鐸は、埋蔵文化財の調査後に事業が施工されるソヴィエトの先進的な事例を紹介している。1953

年発令の基本建設にかかわる事前調査の指示によって、大型建設プロジェクトの際には施工前に文化財部門に届け出て、地下のボーリング調査を行なわなければならないことが周知された⁶²⁾。以後この方式が一般的となった。

(2) 基本建設の事前発掘調査費用

1950年代初頭の中国では、事前発掘調査費を文化財部門が負担していた⁶³⁾。ソヴィエトの当時の文化財関連法規では、遺跡や文物に対する破壊や現状変更が許可される場合には、その必要経費は認可された事業者が負担することと規定されていた⁶⁴⁾。1953年に鄭振鐸は、「基本建設事業の予算の中に、5～10%の発掘調査費が含まれている」というソヴィエトのやり方を紹介した⁶⁵⁾。その後、中国はソヴィエトに倣って、事前発掘調査費を事業者が負担するという方法に徐々に変更していった。

(3) 「文物保護単位」管理制度

ソヴィエトは成立後、徐々に文化財保護制度を整備し、文化財をその価値の大きさによって「各共和国級」と「全ソヴィエト連邦級」の二種類に分け⁶⁶⁾、さらに後者の中で特に重要なものを「禁止類」とし、保護をしていた⁶⁷⁾。チェコスロバキア⁶⁸⁾やルーマニア⁶⁹⁾もソヴィエトの制度を模倣した。中国も1950年代にソヴィエトから「先進的組織制度と運営方法」といった文物保護政策を学び、「文物保護単位」を創設したのである⁷⁰⁾。

1961年の「文化財保護管理暫定条例」では、ソヴィエトの等級制度に倣って「文物保護単位」を「県級」、「省級」、「全国重点文物保護単位」の三等級に分けている。

この他、中国の文化財関連法規の中に「文物保護単位」周辺を建設規制地区とする規定があるが、これもまたソヴィエトからの影響と言える⁷¹⁾。

VIII. まとめ ～ソヴィエト考古学の影響と評価

ソヴィエト考古学は1950年代の10年間に、中国考古学に大きな影響を及ぼした。最後にその功罪について、客観的な分析を試みたい。

ソヴィエト考古学が中国考古学にもたらしたマイナス面の一つ目に、考古資料を用いてマルクス主義の古典や政治指導者の著作を解釈することが挙げられる。二つ目は学術問題で、ソヴィエト固有の部分が中国の状況に適合しない

場合があるということである。これは考古学の位置づけや発掘方法、考古用語といった様々な問題をはらんでいる。例えば、ある一つの学術論争が、プロレタリアートのかブルジョアジーのかといったレッテル貼りに終始してしまい、客観的な評価ができなくなってしまうことがある。また、考古学を物質文化史研究と同一視して、「考古学者の責任は地山まで掘り下げることだけ」といった極めて単純な認識もあり⁷²⁾、ソヴィエト考古学を受容には一定の限界性がある。

しかし、一方でソヴィエト考古学には積極的に評価すべき面がある。1950年代のソヴィエト考古学は理論と方法、技術など多くの方面で世界トップの水準にあり、人材育成や文化財関連法整備などでも経験豊富であった。当時の中国は、考古学的な人材が不足していた上に、開発に伴う事前調査には習熟していなかった。いささか教条主義ではあったが、中国はその重要な課題にマルクス主義をもって対処していった。1950年代は廃墟からの復興をめざした時期で、中国考古学界はソヴィエト考古学から多くの有益な要素を吸収して難局を乗り越え、自身の発展を強力に推進したのである。

陳星燦、錢耀鵬、張良仁の各氏からは、本稿の執筆に対して多くの貴重な修正意見を頂戴いたしました。ここに深く感謝の意を表します。

註

(中国語訳出文献については、原著の出版国名を以下のように略号で示した。[ソ] = ソヴィエト連邦、[英] = イギリス。)

- 1) Zhang Liangren 2011 「Soviet Inspiration in Chinese Archaeology」『Antiquity』Vol.85 No.329 pp.1049-1059
これは現時点で中国におけるソヴィエト考古学の影響について議論している唯一のものである。制度設計と実地調査の観点からソヴィエト考古学が中国の考古学に及ぼす影響を研究した。
- 2) 中央古物保管委員会編訳 1935 「蘇俄古物保管法律」『各国古物保管法規彙編』中央古物保管委員会
- 3) 黄值生 「蘇聯歴史科学轉向中之国立物質文化史学院」『蘇俄評論』1937年第4期
- 4) 夏鼐 「中国考古学的現状」『科学通報』1953年第12期
- 5) 王伯洪・王仲殊 「蘇聯考古工作訪問記」(一)・(二)・(三)・(四)

- 一七) 『考古』1959年第2・4・5・9期
- 6) [ソ] 奥克拉德尼科夫 1980 「蘇聯科学院西伯利亞分院の歴史研究」『蘇聯考古文選』文物出版社(内部発行) p.6
- 7) [ソ] A. И. 克魯沙諾夫 1980 「關於遠東歷史研究的組織工作」『蘇聯考古文選』文物出版社(内部発行) p.55
- 8) 吉林大学歴史系ほか 1971 『奥克拉德尼科夫言論集』(謄写版)
[ソ] 奥克拉德尼科夫著・顧銘学訳 1975 『西伯利亞的古代文化』吉林省考古研究室刻印本蘇聯考古文選訳小組編訳 1980 『蘇聯考古文選』(内部発行) 文物出版社
- 9) [ソ] 奥克拉德尼科夫著・莫潤先ほか訳 1982 『濱海遙遠的過去』務印本館(内部発行)
[ソ] 列・謝・瓦西里耶夫著・赦鎮華ほか訳 1989 『中国文明的起源問題』文物出版社
- 10) 汪寧生 「仰韶文化葬俗社会組織的研究—說及其方法論的商榷」『文物』1987年第4期
- 11) 童恩正 「摩尔根模式与中国的原始社会史研究」『中国社会科学』1988年第3期
- 12) 傅斯年口述・王培棠記錄 「考古学的新方法」『史学』1930年第1期
李濟 1936 「〈田野考古報告〉編輯大旨」『田野考古報告』商務印本館 p.1
- 13) 林惠祥 1934 『文化人類学』商務印本館 p.15
- 14) 蘇秉琦 「如何使考古工作成為人民的事業」『進步日報』1950年3月28日(蘇秉琦 2009 『蘇秉琦文集』(二) 文物出版社 p.92 に再録)
- 15) V. A. Bulkin・Leo S. Klein and G. S. Lebedev 1982 「Attainments and Problems of Soviet Archaeology」『World Archaeology』Vol.13 No.3 p.279
- 16) [ソ] 吉謝列夫著・張全新ほか訳 1950 『吉謝列夫講演集』新華書店 p.56
- 17) [ソ] A.B. 阿尔茨霍夫斯基著・樓宇棟ほか訳 「“考古学通論” 緒言」『考古通訊』1955年第4期
- 18) 張忠培ほか 「筆談“厚古薄今”」『考古』1958年第8期
- 19) 曾騏 「評裴文中先生在〈考古学基礎〉中的“石器時代考古總論”」『文物』1959年第1期
- 20) 裴文中 「旧石器時代考古学常識(続)」『文物』1959年第5期
- 21) [ソ] A. П. 蒙蓋特著・華平訳 「蘇聯考古学“緒言”(第一章)」『考古通訊』1956年第5期
- 22) [ソ] A. П. 蒙蓋特著・華平訳 「限于絕境的資産階級考古学」『考

- 古通訊』1956年第3期
- 23) 尹達 1943『中国原始社会』作者出版社 pp.5～14・pp.31～105
- 24) 夏鼐「關於考古学上文化的定名問題」『考古』1959年第4期
- 25) 夏鼐 2000「再論考古学上文化的定名問題」『夏鼐文集』(上) 社会科学文献出版社 pp.359～366頁
- この論文は1961年春に書かれ、中国科学院考古研究所内部で回覧されたが、生前に公表されることはなかった。
- 26) [ソ] B.A. 布尔金ほか著・劉茂訳「蘇聯考古学的成就和問題」『史前研究』1985年第4期
- 27) 北京大学考古專業學術批判小組「論資產階級器物形態学的偽科学」『考古』1958年第11期
- 28) [ソ] T.C. 帕謝克著・石陶訳「特黎波里居址の田野考察方法」『考古通訊』1956年第3期
- 29) [ソ] П. А. 阿鳥杜辛「“田野考古工作方法”教学大綱」『考古通訊』1956年第1期
- 30) [ソ] П. А. 叶芙犹霍娃「論蘇聯近代考古工作方法的某些問題」『文物參考資料』1955年第4期
- 31) 張雲鵬「由湖北石家河遺跡發掘方法的主要錯誤談學習蘇聯先進經驗」『考古通訊』1957年第2期
- 32) [ソ] И. М. 坡克羅夫斯卡婭ほか著・王伏雄ほか訳 1956『花粉分析』科学出版社年 pp.27～28
- 33) 周昆叔「西安半坡新石器時代遺跡的孢粉分析」『考古』1963年第9期
- 34) [ソ] C.A. 謝門諾夫「原始技術研究序論」『民族問題叢』1957年第10期
- [ソ] D. 戈爾耶夫「史前時代技術的研究」『考古』1959年第1期
- 35) 劉敦願「論考古学痕跡資料的重要作用」『山東大學學報』1961年第3期
- 佟柱臣「仰韶、龍山文化的工具使用痕跡和力学上的研究」『考古』1982年第6期
- 36) [ソ] M.M. 格拉西莫夫著・吳新智ほか訳 1958『從頭骨復原面貌的原理』科学出版社
- 37) 吳汝康ほか「中国猿人女性頭象的復原」『古脊椎動物与古人類』1959年第3期 pp.147-150
- 38) B.K. 尼科爾斯基著・龐龍訳 1952『原始社会史』作家書屋 p.11
- 39) [ソ] 柯斯文著・張錫彤訳 1955『原始文化史綱』人民出版社 p.6
- 中国科学院考古研究所訳「考古学」『文物參考資料』1953年第12期
- [ソ] A. П. 蒙蓋特著・華平訳「蘇聯考古学“緒言”(第一章)」『考古通訊』1956年第5期
- 40) 夏鼐 1964「中国原始社会史論集・編后記」(夏鼐編)『中国原始社会史論集』歴史教学出版社 pp.359～360
- 41) 張忠培 1999「中国考古学路上不会消失的足跡—悼念夏鼐先生」『中国考古学：走近歷史真實之道』科学出版社 p.19
- 42) [ソ] 柯斯文著・張錫彤訳 1955『原始文化史綱』人民出版社 pp.16-17
- 43) 吳震「關於“猿人”這一名称的商榷」『考古通訊』1957年第2期
- 吳震「關於“猿人”名称的討論」『考古通訊』1957年第6期
- 44) [英] 保羅・G・巴恩主編・郭小凌ほか訳 2000『劍橋插图考古史』山東画報出版社 p.207
- 45) Henry Field and Kathleen Price 1947「Review of Soviet Archaeology 1919-1945 In Historical Perspective」『Southwestern Journal of Anthropology』Vol.3 No.3 p.219
- 46) 祖熙編訳「波蘭的史学研究機関」『歴史研究』1960年第1-2期
- 47) 張寧・李東楨訳「解放以後十五年来的朝鮮考古」『考古』1962年第7期
- 48) 徐萃芳 2012「中国現代考古学發展的歷程」『中国歴史考古学論集』上海古籍出版社
- 49) 夏鼐「中国考古学和中国科技史」『考古』1984年第5期 50) 前掲註 21)
- 51) [ソ] H.H. 切博克沙羅夫「民族学基礎講座：第四章人類的人們共同体和經濟文化類型」『民族問題叢』1957年第8・9期
- 52) 俞偉超 1996「關於“類型学”的問題」『考古学是什麼』中国社会科学出版社 p.105
- 53) 張忠培 1986『中国北方考古文集』文物出版社 p.265
- 54) 蘇秉琦「園夢之路」(上)『東南文化』1955年第4期
- 55) 蘇秉琦「園夢之路」(下)『東南文化』1956年第1期
- 56) 前掲註 54)
- 57) 吳榮曾・高東陸・耿引曾への取材 2012『記憶—北大考古口述史』(一) 北京大学出版社 p.71・.263・398
- 58) 前掲註 55)
- 59) 「蘇聯考古学的成就和問題」『史前研究』1985年第4期
- 60) 孫家晋・謝辰生「配合基本建設，做好文物保護工作」『文物參考資料』1953年第7期
- 61) 薛繼軍主編 2008「考古学家石興邦」『大家』(8) 商務印本館

p.170

- 62) 「中央人民政府政務院關於在基本建設工程中保護歷史革命文物的指示」1987『新中国文物法規選編』文物出版社 p.20
- 63) 王可 2007『王冶秋傳』文物出版社 p.195
- 64) [ソ] A. π. 蒙蓋特著・華平訳「蘇聯考古学“緒言”(第一章)」『考古通訊』1956年第5期 p.109 注釈⑧
- 65) 鄭振鋒「基本建設人員應有的古物知識」『文物參考資料』1953年第2期
- 66) 「蘇聯部長會議第三八九八号決定的補充:古物保管条例」(1948年10月14日)「文物參考資料」1951年第2期
- 67) 羅容「談文物古跡的普查工作」『文物參考資料』1956年第5期
- 68) 武伯綸・羅哲文「記捷克斯洛伐克的文物保護工作」『文物參考資料』1958年第7期
- 69) 王一平・陳建平「訪問羅、波兩國的博物館和文物保護工作」『文物參考資料』1958年第6期
- 70) 陳生「學習蘇聯,使文物事業更好地為社會主義建設服務」『文物參考資料』1957年第11期
- 71) 王運良「文物保護單位管理制度与国外類似經驗」『中国文物科学研究』2011年第4期
- 72) 前掲註21)

訳者後記

本稿は、劉斌氏と張婷氏が共同で執筆した「中国考古学发展中的苏联影响」(『东南文化』2016年第5期总第253期 pp.32～39)を日本語訳したものである。執筆者の一人、劉斌氏は考古学研究史や中国先史考古学の研究を中心に活躍されており、2018年9月から2019年3月まで榎原考古学研究所で研修された。本稿の一部は、2018年11月16日に榎原考古学研究所談話会にて骨子を口頭発表されたものである。訳出を許可頂いた両氏に謝意を表します。

訳者註

訳註1)『考古通訊』は1955年1月に中国科学院考古研究所(社会科学院考古研究所の前身)によって創刊された学術誌で、1958年7月に誌名が『考古』に改められ、現在まで継続的に刊行されている。

挿入写真・挿図出典

- 写真2:北京大学考古文博学院編2012『北大考古口述史(一)』北京大学出版社 p.452
- 図2
上2点:石興邦「略談新石器時代晚期居住遺址的発掘」『考古通訊』1956年第5期 図2・5
- 下左:中国科学院考古研究所編1959『廟底溝与三里橋』科学出版社 p.14 図6
- 下右:中国科学院考古研究所1963『西安半坡』文物出版社 p.15 図14